

# 人生を拓く ひら

(27)

蝶野 政博さん ちやうの まさひろ  
(85) 117北町内会 11

1895(明治28)年、曾曾祖父と曾祖父の照一さん(当時39歳)、祖父幸之助さん(年齢不詳)の3人で渡道してきました。のちに幸之助さんに嫁いだ祖母カネノさん(昭和38年、81歳で没)の話によると、「北海道の開拓に行ったら戦争に行かなくてもいい」と言われて北海道に渡って来たそうです。



「これもカネノばあちゃんからこどものころに聞いたことだけだね、嫁に来たころの家は隙間だらけのわら造りで、入り口に蓆(むしろ)を下げて扉の代わりにしとったんだよ。わら布団に潜り込んで寝とったんだよね」。入植当時は、簡易な掘っ立て小屋程度の建物で暮らしながら原生林を開くという苦勞の連続でした。

政博さんは、父親教栄さん(昭和60年、80歳で没)、母コトミさん(平成14年、96歳で没)の3人姉弟の長男。「おばさんがそろそろ見合いませんか?」と進め、1956(昭和31)年、26歳の時に愛別町の農家の末娘だったスミノさん(当時25歳、平成10年67歳で没)と結婚しました。

翌年、一家3世代6人が暮らす住宅を新築。多い時には9人家族が暮らすにぎやかな家庭でした。妻のスミノさんは働き者で、父母と4人で5町歩(約5畝)の水田を耕作しました。

現金収入を得るため、政博さん夫婦は結婚当時から客土工事に働きに出ていました。3、4年後のある時、スミノさんが現場で腰を痛め、以来入退院を繰り返すようになって農家仕事も出来なくなっていました。のちにパーキンソン病も患って病院で寝たきりの生活に。

「どこの病院も3カ月しか置いてくれなくて、次々と病院を回ったんだよ。ばあちゃんがご飯支度してくれたからよかったけれど、一人では農家のやり繰り出来なかったから、働きに出たんだ」と土木会社に勤めながら田んぼを守り、2年前まではピーマン出荷も続けてきました。

農家を止めてからは自家用野菜を作りながら、趣味のパークゴルフをするのが楽しみ。コースでは友達との会話も弾んでいるようです。

## 俳句

夜濯やしばし虫鳴く庭に出て	杉山りつ
じいじいとオールシーズン蝉時雨	こばやし 星来
夏風邪に親の時間も止まりけり	横田則子
庭先に迷い降りたる鳴けぬ蝉	若田久
ゆでたまごつるんとむけて初夏の丘	高瀬潤
二人には聞こえていない蝉しぐれ	石澤清宏
目覚めればただ蝉の鳴く蝉しぐれ	三島智
音符めく夜半の向こうに夏蛙	若田郁
虹の橋渡れば明日が見えてくる	本田咲
大地行くサイ口の隣は麦畑	佐々木りえ
サングラス逆さにかけてしたり顔	山内みゆ
蝉しぐれ生きてる生きてる生きてる	小林ろば
ねじ花のねじり上手の鉢一つ	高橋公花
山峡に音律よろし蝉の朝	杉山 ひろのり
新緑や日毎ぐいぐい迫りくる	保科なほ
窓閉めて蝉の声断つ真昼かな	徳光吐 苦

